

## 1. H26 広島土石流災害の概要

平成 26 年 8 月 20 日未明から明け方にかけて、広島市安佐南区から安佐北区では約 3 時間で 300mm 近くの極めて激しい降雨に見舞われた。この影響で、同地区を中心に土石流 107 箇所、斜面崩壊 59 箇所の土砂災害が発生し、その結果、死者 77 名、重軽傷者 68 名の人的被害、および、全壊～損壊合せて 585 棟、浸水 4,164 棟の住家被害を引き起こした。

とくに被害が甚大であった地区は、安佐南区の八木・緑井地区であった。当該地区は、阿武山（586.4m）を頂とした山地の南東側に開けた扇状地（沖積錐）であり、主には広島市郊外の住宅地として利用されている地区である。広島市の都市化が進む中で、八木・緑井地区は比較的広島市街地に近いということもあり、ベッドタウンとして人気を博しており、そのため昭和 40 年代には既に山際まで住宅が立ち並んでいたが、その後も斜面上方へと宅地開発が行われ、現在見られるように谷の奥まで宅地化が進んでいる。

当該地区が、過去に複数回発生した土石流により形成された扇状地であることは、旧町史等の文書に明記されており、また、地区に古くから伝わる昔話「蛇王池物語」でも、土石流を大蛇と見立てた寓話が伝わっていた。しかしながら、これらの古くからの記録や言い伝えが活かされることはなく、無秩序な開発、そして災害に対する無知・無防備の結果が、甚大な被害に至った最大の要因であることは間違いないであろう。

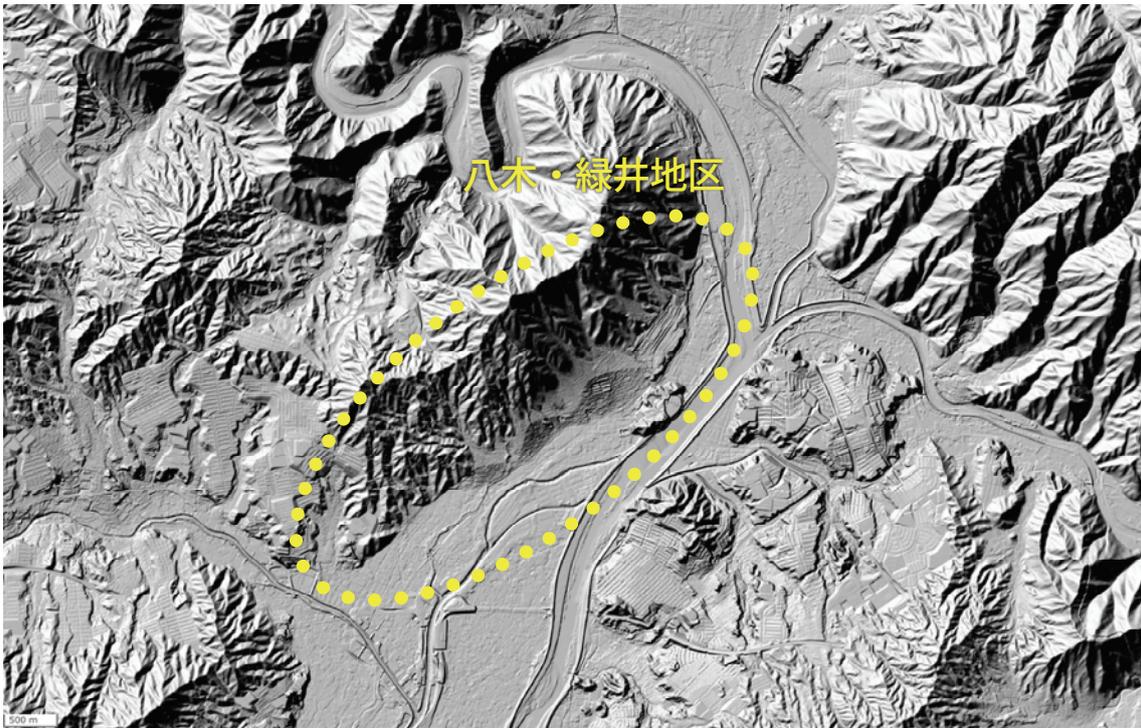


図1 八木・緑井地区位置図（引用：国土地理院「地理院地図」）

## 2. 被災後と今

この土石流災害が発生した 11 日後の 8 月 31 日に、八木地区の被災現場の踏査（土木学会と地盤工学会の合同調査）を行っており、被災直後の状況と、それから約 3 年が経過した今の状況を、以下に示し比較する。なお、私が踏査に関わった箇所が、県営住宅付近（303

溪流谷出口) と、阿武の里団地の溪流 (306 溪流) の 2 箇所であったため、これらについてのみ示す。



図2 溪流位置図 (引用：国土地理院「地理院地図」)



図3 H26 被災直後の航空写真 (引用：アジア航測 HP)

(1) 県営住宅付近=303 渓流【写真左：H26.8/31、写真右：H29.11/19】



写真1 谷出口付近（下流から上流を望む）



写真2 谷出口付近（上流から下流を望む）



写真3 谷出口付近（下流から上流を望む）



写真4 県営住宅付近

(2) 阿武の里団地=306 渓流【写真左：H26.8/31、写真右：H29.11/19】



写真5 阿武の里団地 (その1)



写真6 阿武の里団地 (その2)



写真7 阿武の里団地 (その3)



写真8 阿武の里団地上端部 (=谷出口付近)



写真9 阿武の里団地上端部付近（上流から下流を望む）



写真10 阿武の里団地上端部付近（上流から下流を望む）

### 3. 個人的感想

今回、H26 広島土石流災害の発災直後と、その約3年後の復興状況を視察することができた。緑井地区においては、34の溪流に対して砂防施設の建設が計画され、今も工事が行われている最中である。すべての工事が完了するのは平成31年、つまり、発災から5年後となる。34溪流すべてに対し、5年で調査設計から施工まで対策を完了させることは、驚異的な速さであり、住民の安心・安全を確保するべく、国がいかに本気で取り組んでいるかの表れとも取れる。

しかし、このような土石流災害を未然に防ぐことはできなかったのではなかろうか？当該地区では、地形地質の側面、あるいは近世の記録や口伝・寓話などの面から、土石流災害のリスクが高い箇所であったことは明らかであった。

災害に対し安全な暮らしを得るためには、地区の災害リスクを正しく把握できる知識を持つことが、住民側と、開発許可を下す行政側の双方に求められ、その手助けを我々技術士が担うことができると考える。



写真11 県営住宅裏に設置された犠牲者慰霊碑

—以上—